

「辺野古」報告

3月14日～3月25日(2017.3.29)

今回は、ほぼ名護の宿と辺野古を往復した。天候の関係で海に出られなかった1日はゲート前に、日曜日は高江に、あとは海に出た。2月3月の沖縄の海は荒れることが多い。大浦湾側は特に、強風、高波、うねりがあり、木の葉のようなカヌーは、あおられ流され、同じ所に留まるには漕ぎ続け、体力を必要とした。

1月に行った時に、ちょうど張られていた、V字型鉄棒にロープを張ったフロートはさらに手を加えられていた。ロープは波に揺られすぐに切れてしまうため鉄棒の穴にひもを通した上でロープにつなぐ、V字フロートがひっくり返るため四角い枠が2m置きぐらいいに取り付けられ、辺野古側のフロートには1mぐらいの高さに緑の網が張られ、大浦湾側には1m間隔で俵状のものがくぐられ(船を通さないため)フロートには網が張られている。どんだけ無駄なお金をかけていることか。それでも壊れ続けるため、頻繁に、切れたロープを繋いだり、鉄棒をたてている鉄枠を交換したりボルトを替えたり。カヌーと抗議船を入らせないために、次々に小学生の工作まがいのものを発注して、それはそれで、役立たずでも、儲かる企業にとってはほくほくのことなのだろう。

フロート内にはいくつもの台船が入っている。日曜日にはさらに2台+αが加わっている。赤クレーン、赤白クレーン、黄色、黄色白、それに資材を積んでいるパーシブ船。何より、どんと、まるで、海の上にビルが建ったかのように巨大な、ポセイドン(ギリシャ神話の神に失礼だ)全長78m、3kmまで掘削できるという船が2月4日から、24時間動き調査をしている。これもすごい単位のお金が毎日出ているはず。

海の作業は、かなりのハイペースで行われている。本来なら、ボーリングが終わり、潜水調査が終わり、その結果を基にという段取りを踏むはずの作業が、並行してどんどん行われている。専門家が何人も指摘している「汚濁防止幕」も不思議なことだらけだ。全部を囲うわけではなく、海中に垂らす長さも7mと水深にはほど遠い短さ、台風対策で一部は撤去せず「浮沈式」と言って空気を抜いて沈めたり浮上させたりするというが果たしてうまくいくものなのか?マークだらけの敷設をしている。

汚濁防止幕設置の作業は、張られてしまったフロートからは遠く、なかなか阻止どころか、抗議も難しい。水中カメラでの撮影やブロックを落とすための潜水調査、「環境調査」

とはいうものの基地建設につながる潜水調査等、できるものはできる限り抗議・阻止行動を行った。ある日、フロートの外の調査船の潜水調査を止めた。海人、ダイバー、対カヌーだと止められる。Nさん、Kさんの必死の本気のがんばりにダイバーはもぐれずにこの日は諦めた。海保はこの時1艇がいただけ。次の日は待ちかまえていた海保に引きはがされる。海人との話も面白かった。この船は年取っているけど、まだ生きているんだから、カヌーぶつけないでよ。外で会ったらコーヒーぐらいごちそうするよ。あんまりしゃべっているとあっちから全部監視しているからスパイだと思われちゃうよ。

カヌーは多いときは20艇近くにもなるが、10艇を割ることもある。昼間から来られる常連はそれほどいない。まして「日当」などもらっていないのだから。休暇を取ったりやりくりして来ている。7時ミーティング、8時前には出艇しているが、こちらが行くのを見越して作業開始も早くなっている。辺野古崎まで、3～40分かけて漕いでいく。様子を見ながら大浦湾の方に入る。カヌーが入らないようにあれやこれやの防止線を張っているのだから、フロートを越えるのは大変にはなっている。それでも工夫し、それぞれのやり方で越えていく。海に入りフロートの下をくぐることもある。こちらのカヌーに対し、海保の数が勝っているのだから、なかなか作業現場に近づけないまま「拘束」されることが多い。日に2度3度拘束されることもある。海保は、言葉は丁寧だが荒っぽい。24日はすぐ近くで大きなクレーン船が来て鉄板を落とし始めた。2度目のフロート越えの時、「あるたいら」という海保の司令船が来て「いい加減にしろ」と怒鳴った。それまで「下がってください」と繰り返していたGBに乗った海保は、それを聞くと途端に乱暴に拘束しGBに引きずりあげた。

ポセイドンは天候に左右されず24時間動く。台船は日曜日に入ったり、作業も、抗議行動のない日曜日に行われたりする。以前は強風高波で中止していた作業も、悪天候の中強引に行われたりしている。強風の注意報が出ていたりすると、海保のGBが近寄ってきて「今日は波が高いですから気をつけて抗議行動をしてください」と言いに来る。「天候悪いから作業中止するよう言ってくださいよ」と返すけど、かなりの波風の中、フロートの修理もしている。この強引な工事の強行は、そう指令が出ているのだろう。

ある日は、人が足りなくて船に乗り船長の補佐をした。これも大変なことだった。カヌーとは目線が違うから、気をつけなければいけないことも違う。カヌーがどこに何艇いるか、何人確保されたのか、今、他の船がどこにいるのか。泥縄でもよい結びやアンカーの結び方なども教えられた。

抵抗をやめない。少しでも工事をさせないために、各自毎日考え行動している。7時か

ら4時5時までの海の行動が終わるとどっと疲れて1日が暮れる。

日曜日、嘉陽のおじいのお宅にお邪魔した。亡くなられた時、告別式等に参加できなく、気になっていたのも、明るい春のお花を持って伺った。クリスチャンなのでお線香はあげないとお連れ合い。いくつものおじいの元気な写真に出会った。いないということが寂しい、と。ちょうど文化の日、11月3日に亡くなった。元気なころの、嘉陽のおじい語録はたくさんある。よく来てくれたと、握手をし、出航するときなど「エイエイ、オー」と手を挙げ鼓舞した。お連れ合いが作ったという白い帽子をかぶった写真を持っている。基地建設白紙撤回を見ずに残念だったろう。でも、最後まで、戦争反対と、火曜日はテントに座っていた。

日曜日には高江に行った。現さんに会った。奄美から帰ってきてくれてよかった。抗議する人もいないのにN1ゲート前には民間警備員17名が立っていた。無駄無駄無駄。費用が何倍にもなったのは反対派のせいだとも言うのだろう。

白波が立ち、雷注意報が出ていたある日は、海上行動がなかった。上から大浦湾の状況を見てからゲート前に行った。木曜日だった。水曜日は大行動日になっているが、それ以外の日は何とも寂しい。40人ぐらいだったろうか。この日は9時半に座り込みを排除され20何台かの車両が入っていた。昼休憩というので、向かいのテントでお弁当を食べているとメインゲートから機動隊が出てきたので、慌てて工事車両用ゲートに向かう。途中で止められるも、潜り抜けて工事用車両ゲートへ。わずかな人数の座り込みだった。あっという間に排除。2人に両腕をつかまれ、さらに3人目が足を持とうとしたので、足を持たせないように抵抗し手こずらせた。すると、露骨に腕をねじ上げ、手首を強い力で折り曲げた。明らかに必要以上にわざとねじ上げている。何日か前にはSさんが指を逆に捻じ曲げられ骨折している。痛めつけ方が手馴れている。昨年、1月、ブロックを積み上げたのは、1日に何回も年配者が排除されていくのを見て、精神的にも肉体的にも、あまりに忍びない、というので、始まったものだ。オブジェは芸術だと、ブロックに絵も描かれて各地からも送られてきた。ユニークな抵抗の表現活動だった。それが1年たってから、威力業務妨害、と名付けられた。

この日は、工事用車両が待機している地点で、20人ぐらいの人が出口の

歩道を歩き、40分止めたという。創意工夫、考えながら、次は何ができるのか、どうやったら少しでも遅らせられるのか、闘いは続く。海でも陸でも。諦めはしない。

18日、あるお宅で飲んでいたら、博治さんが釈放されると情報が入った。FBのツイキャスで見る。7時前後と聞き、6時半から待つも、やっと8時ごろ段ボールを持ってやってくる。那覇に駆け付けた人たち、ツイキャス等見ていた人たちにとって、感動の再会だった。痩せてはいるものの泣きそうな顔や笑顔はそのままだった。

21日、海上行動が天候の関係で早く終わったので、目取真さんの裁判の傍聴に行った。32人の傍聴席に40人以上が集まり、抽選だったが入れた。昨年4月1日にカヌーに乗っていて、浅瀬でシュワブの陸上に引きずり込まれ拘束、逮捕された。基地内に8時間も放置されたことへの国賠訴訟だ。地位協定が憲法違反と真っ向から取り上げると違って、受け手の海保・国側は、想定外でおろおろとしているようでちょっと面白くなりそう。

そして帰る日の25日はゲート前集会だった。主催者発表3,500人。集会前に博治さんがスピーチ。力強い博治節が戻ってきていた。翁長知事も参加し、埋め立てを撤回することを表明。

工事は着々と進んでおり、工事関係車両は1日何十台も入るようになり、生コンプラントも基地内に作られようとしている。海での作業も、申請内容とは異なることを、変更届も出さずにどんどん進めている。金をふんだんに使い、機材、人材をどんどん投入して。知事が撤回をするといっても、決して展望は明るくはない。高江で強行した何でもありが、辺野古でも行われている。共謀罪は沖縄の抵抗運動に襲い掛かってくるだろう。南西諸島の自衛隊配備も現地首長の受け入れをもとに、どんどん進んでいこう。

「今こそ立ち上がろう」の元歌の2番「行く手は見えぬが 立ち止まりはしない」が思い浮かんでしまう。抵抗をやめるわけにはいかない。何度でも「勝つ方法はあきらめないこと」と胸に刻みながら。

以上